

『新版 UEB ベーシックマスター 英語点訳の基礎』のここが *New!*

日本ライトハウス
点字情報技術センター
福井哲也

この資料は、これまで 2016 年発行の『UEB ベーシックマスター 英語点訳の基礎』（初版）を利用してこられた方々のために、2021 年発行の「新版」で加筆・修正した主な箇所を紹介するものです。（p.22 は墨字版 22 ページ、点 1-61 は点字版第 1 巻 61 ページで、いずれも「新版」のページ数です。）

【本書の構成】

（1）別表「UEB 記号一覧」を挟み込んだ。これは、本書で解説する縮約や記号を一覧表にしたリーフレットである。点訳・校正・墨字訳の際、脇に置いておくにととても便利。（点字版は第 3 巻 157～172 ページに同じ内容の記号表を掲載している。）

*UEB の全ての記号を網羅しているわけではない。本書では、英語の一般的な文書を記述するための基本的な文字・記号類 341 個と、発音記号 38 個について解説しており、別表にもそれらを載せている。ちなみに、UEB の規則書 *The Rules of UEB Second Edition 2013* の付録 3 「Symbols List」には、780 以上の記号が掲載されている。

（2）点訳練習の「書きましょう」に、新たに「語注」を付した。縮約を学ぶ第 2 章第 6 節～第 1 5 節の「書きましょう」の練習文を一新するとともに、難しい語句の日本語訳を示す「語注」を新たに設けた。英語を母語としない人にも一層学びやすいテキストに。

（3）規則に付した 1-1、1-2 等の番号、およびその小項目に付した (a)、(b) 等の記号は、極力初版のままとした。規則の番号を変更せざるを得なかったのは第 2 章第 1 7 節で、初版の「1 7-2 電子メールなどのアドレスの書き方」を 1 7-3 に繰り下げ、新たに「1 7-2 斜線で区切られた語」を挿入した。なお、「読みましょう」「書きましょう」は、節の番号とリンクさせるため、番号の振り方を変更した。

【解説を充実】

A. UEB 規則改正

(1) コーテーションマークのダブルとシングルの使い分けについて、2019年10月のUEB規則改正に合わせ2-9 (p.22 点1-61) を修正。

前の規則では、1マスのコーテーションマーク $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ は、その文章中で最も使用頻度の高いコーテーションマークに用いるとされていたが、新規則では $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ がダブルコーテーションマーク (“ ”)、 $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ がシングルコーテーションマーク (‘ ’) と、対応関係が明確化された。その上で、イギリスのように外側にシングル、内側にダブルのコーテーションマークが使われる場合、その文章全体にわたりダブルとシングルのコーテーションマークの点字記号を入れ替えることが許容された。

これに関連して、2マスのダブルコーテーションマーク $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ を使用する場合について、2-1 (c) (p.183 点3-69) に記述。

また、 $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ («») の名称が、「イタリアンコーテーションマーク」から「ダブルアングルコーテーションマーク」に変更された (p.181 点3-55 「句読符」の表)。

《注意》点訳書の巻頭にUEBの記号説明を掲載している場合は、記号の名称に注意。

(2) 付録2「短形語リスト」(p.206 点3-126) に、2020年4月に追加されたDeafBlind (DとBが大文字) を掲載した。

B. 指示符・句読符

(1) 大文字と小文字が混じった綴りに関する4-2 (b) (p.35 点1-89) に、大文字が大文字単語符の効力を終わらせる例として、USAir $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ を追加した。

《注意》『日本点字表記法 2018年版』においては、USAir を外国語引用符で囲む場合は $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ と書くことを認めているが、外文字を前置する場合、 $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ という書き方は認めておらず、 $\ddot{\text{”}}$ ～ $\ddot{\text{’}}$ と書くことになる。

(2) イタリック単語符など書体単語符の効力はダッシュの後にも及ぶことについて、2-1-2 (d) (p.176 点3-45) に例を挙げて記述。

(3) 複数の段落がコーテーションマークまたはカッコで囲まれている場合、各段落の始まりに開き記号を書き、最後の段落の終わりにだけ閉じ記号を書く。これはもともと墨字の習慣であって、点字特有の規則ではないが、点訳の際迷わないよう2-9 (c) (p.23 点1-64)、2-10 (d) (p.24 点1-67) に追記した。

これと似た点字の規則として、複数の段落が全て大文字で書かれている場合、各段落の始まりに大文字パッセージ符を書き、最後の段落の終わりにだけ大文字終止符を書く。この点を、4-1 (d) (p.34 点 1-87) に追記した。

複数の段落がイタリック体など別の書体で書かれている場合、各段落の始まりに書体パッセージ符を書き、最後の段落の終わりにだけ書体終止符を書く。この点は、4-4 (c) (p.37 点 1-96)、21-3 (d) (p.178 点 3-49) に記述があったが、詩がイタリック体で書かれている場合について、イタリックパッセージ符は行ごとではなく連ごとに付けることを、21-3 (d) に例とともに追記した。

(4) 感嘆符が語中であって、ff の縮約部と区別する必要がある場合には、1 級記号符を前置する。このことについて、22-1 (a) (p.182 点 3-67) に P!nk (ピンク (アーティスト名)) などの例を挙げて記述。

C. 「単独」の定義

(1) 「単独」の定義について、第 2 章第 10 節 10-1 ~ 10-3 (p.66~71 点 1-163~175) の解説を大幅に詳しくした。また、この節にも「読みましょう」と「書きましょう」を新たに設けた。

(2) 「単独」のアルファベットに 1 級記号符を付ける例として、20-1 (a) (p.167 点 3-24) に人名のイニシャルの例 (G. Marconi, W. A. Mozart) を追加。また、アルファベットが「単独」でないため 1 級記号符が不要な例 (B.C.) も追加。

ハイフンの付いた文字に関する 20-2 (a) (p.169 点 3-27) に、plural ending -s (複数形の語尾 s) の例を追加。また、アポストロフィの付いた文字に関する 20-2 (b) (p.169 点 3-29) に、'E went t' bed. (He went to bed.) の例を追加。

(3) do/did, stop/continue のような斜線で区切られた語については、「単独」の定義との関連で縮約の用法の規則が複雑なことから、新たな項目 17-2 (p.145 点 2-167) を設け、まとめて解説。また、関連する事項を 15-2 (d) (p.120 点 2-110)、17-1 (d) (p.145 点 2-166) にも追記。

(4) アスタリスクと縮約の使用制限に関する 22-3 (b) (p.184 点 3-72) に、but[†], in^{*1}, in[†] の例を追加。

D. 縮約

(1) アルファベット縮約語は、no-can-do, FAMILY-LIKE のようなハイフンで結ばれた複合語に使用するが、but-ton のように音節に分けられた語の一部にアルファベット縮約語を用いることはできない。この点を、6-1 (c) (p.49 点 1-125) に追記した。

(2) 下がり縮約語に関する規則に、「大文字指示符・大文字終止符は、縮約語を使うかどうかに影響を及ぼさない」ことがうたわれている。これに関連し、11-1 (p.74 点 2-3)、11-2 (p.75 点 2-5)、11-3 (p.76 点 2-8) に大文字終止符を含む次の例を追加した。
LET IT BE IT WASN'T ENOUGH DOWN AND IN

(3) 下がり縮約語を使うかどうかは、前後に接する記号などにより変わる。また、下がり縮約語の中でも、be, were, his, was の場合、enough の場合、in の場合で異なることがあり、規則が大変複雑である。そこで、参考2「用例で探す下がり縮約語と記号類早見表」(p.80 点 2-15) を新たに掲載した。

(4) 短縮形 haven't, aren't, ain't などには、下がり縮約部 en, in を使用する旨、12-9 (a) (p.89 点 2-35) に追記。これらは複合語の要素をまたぐ組合せのようにも見えるが、not が n't に変化しているため、複合語という意識が薄いものと思われる。

(5) ある単語について2とおり以上の縮約の用法が可能で、マス数が同じ場合に関する16-2 (a) (p.135 点 2-148) に、末字縮約部より強縮約部を優先する例として De'Longhi (デロンギ) を追加。同じ例を14-4 (b) (p.114 点 2-95) にも追加。

(6) 数字に関する20-7 (a) (p.172 点 3-34) の規則中、数符の後は1級モードになることの説明に、¥500/hour (ou の縮約部は使わない) の例を追加。

(7) 短形語と誤読される「単独」の文字列には、区別のため1級記号符を前置しなければならない(例えば CD)。この規則は、文字列の一部が短形語と一致している場合にも適用される(例えば GDP)。

略記・略称で、一見短形語と誤読しそうにないものでも、1級記号符(または1級単語符)が必要な場合があるので、新たに参考4「短形語の規則と注意すべき略記・略称」(p.148 点 2-172) を設け、詳しく解説した。

これに関連し、1級単語符の用法として、20-5 (b) (p.172 点 3-32) に文字列の先頭以外の部分を短形語と誤読する場合を挙げ、UNSD の例を示した。

E. その他

(1) 「第24節 英語の教科書・試験問題等に用いる表記」(p.190 点3-82)において、ガイドラインの内容に変更はないが、『日本点字表記法 2018年版』発行に伴い、同書に根拠が示された事柄については参照項目を明らかにした。

(2) 付録4「中学部での縮約の学習順序」は、7段階の構成はこれまでと変わらないものの、文部科学省著作中学部英語教科書の2021年度版から、学年ごとの割り当てが変更された。すなわち、これまでは7段階のうち2年生で3段階まで学習していたのが、4段階まで学習するようになったので、その変更を反映させた。

上記B.、C.、D. のほとんど全ての項目は、各地で活動される点訳者の皆様から寄せられたご質問・お問合せがきっかけで、解説の充実を図ることができました。重要な示唆やヒントをいただいた皆様に心より感謝申し上げます。